

教育・臨床・組織におけるインターネットの有効利用

—本連載の記事を一冊にまとめました—

坂元 章（お茶の水女子大学）

われわれお茶の水女子大学社会心理学研究室は、本欄において、1998 年 5 月号から本号まで、2 年余りにわたる連載を担当し、「教育とインターネット」に関する先端的な研究を紹介してきた^[注1]。このたび、この連載記事のいくつかを改稿し、また、新しい内容も加えて、全部で 15 の章から成る本をまとめた（図 1）。書名は以下の通りである。

『インターネットの心理学 - 教育・臨床・組織における利用のために - 』

坂元 章（編） 学文社 181 頁 1900 円（＋税）

2000 年 5 月 15 日刊行

本書の内容

本書は、インターネットの使用によって人間や社会がどのような影響を受けるか、また、それを人間や社会のために、どのように利用できるかについて、心理学やその近接分野で行われてきた研究を紹介しながら論じたものである。とくに、インターネットに関する研究が盛んな教育、臨床、組織の 3 つの分野を取り上げた。

章立ては表 1 の通りである。これに見られるように、本書には、以下の 7 つの部分がある。

インターネットと心理学（序章） 本書の導入として、まず、インターネットの普及の現状と、それに対する心理学の取り組みについて全般的に解説した。最近、インターネットが爆発的に普及し、それとともに用途も急速に多様化していること、それに伴って、インターネットに関する心理学やその近接分野の研究の範囲も大幅に拡大していることを指摘した。また、この章では、読者の便宜になるように、本書の構成を説明した。

教育におけるインターネット（第 1 部） インターネットの利用は、教育の分野において大いに注目されている。教育の現場ではすでに、インターネットを利用した教育実践がしばしば行われ、大規模な研究プロジェクトも見られている。こうした背景には、インターネットは、情報活用能力、国際理解、学力などを向上させる有効な教育ツールではないかという期待がある。そして、最近では、インターネットを最大限に活用して、キャンパスを持たずに運営されるヴァーチャル大学さえも出現している。第 1 部では、これらのトピックを扱い、それに関する研究や実践、大型プロジェクトなどの概要を紹介した。第 1 部は、本書の中で、もっとも多くの頁を割いており、重視した部分である。

臨床におけるインターネット（第 2 部） インターネットの利用は、臨床の分野においても注目されている。臨床の現場では、インターネットによる心理療法が行われており、それは急速に拡大している。インターネットを利用した自助グループの活動も盛んである。

また、インターネットが、障害者や高齢者の活動範囲を広げ、その支えとなりうるものが指摘されている。さらに、インターネットには、異人種や障害者などに対する偏見を低減する効果が期待されている。第2部は、これらのトピックに関するものであり、その研究や実践を解説し、臨床におけるインターネット利用が豊かな可能性を持っていることを指摘した。なお、偏見低減の問題は、必ずしも臨床の分野に入るものとは言えないが、心の問題の解決という点で臨床的な要素を持つと捉えられることから、第2部に含めた。

組織におけるインターネット（第3部） インターネットは、組織における利用や、それが組織に与える影響についても人々の関心を集めている。第3部は、このトピックに関するものであり、とくにコンピュータ・ネットワークを用いた会議の問題を扱った。従来の研究を紹介するとともに、こうしたネットワーク会議は、遠隔地にある参加者の会議を容易にするという物理的な側面での有益性だけでなく、参加者の平等性や創造的なアイデアの産出に寄与するという心理的な側面での有益性も持っていることを明らかにした。

インターネットの影（第4部） 第1部～第3部は、インターネットの有効利用を扱ったものであり、インターネットの光の部分に焦点をあてているが、インターネットには、影の部分があることも、しばしば懸念されている。例えば、1)インターネット使用は人々の社会的不適応をもたらすのではないかと、2)インターネットでは、有害情報が流れやすく、青少年に対する悪影響や犯罪を引き起こすのではないかと、3)インターネットは人々の間の差別や格差を広げるのではないかと、などである。第4部では、これらに関する研究や実践などを解説した。インターネットは、深刻な弊害を引き起こす潜在力を持っているが、恩恵も非常に大きいので、その利用に対して単純に背を向けるのではなく、むしろ、弊害を減らし恩恵をさらに増やすためにそれをどのように利用するかを模索することが重要であると主張された。

インターネットの有効利用（終章） 終章で、第1部～第4部の議論をまとめた。各章の内容を要約するとともに、それを踏まえたうえで、なぜインターネット利用は有効であるかを議論し、さらに、今後のインターネット研究と実践について触れた。

インターネット用語の解説 最後に、付録として、インターネットに関する重要用語の解説をつけた。本書の中で、読者が意味の分からない言葉に出会っても、これでその意味を確認できるようになっている。

本書の特徴

本書には3つの特徴がある。

幅広さ 先述したように、最近になって、インターネットの用途は格段に広がり、それに伴って、心理学や近接分野におけるインターネット研究や実践の範囲も大幅に拡大した。これまでにも、心理学的な観点からインターネット利用を扱った書物はいくつも出されてきたが、現在の研究や実践の範囲の広さには対応し切れていないように見える。とくに実証研究の紹介に弱みが見られる。本書は、そのように拡大した範囲の研究や実践を網羅的に解説しようとするものであり、幅広さや網羅性の点で優れたものである。

先端性 インターネット技術は日進月歩であり、それゆえ、インターネット研究や実践の知見に関しては、先端的であることが非常に重要である。そこで、本書では、知見の先端性に対して十分に目配りし、海外で新しく行われた研究や実践も意欲的に取り上げるようにした。

実用性 一般に、心理学の分野では、実用性の側面はあまり問題にされず、インターネット利用に関しても、基礎的、理論的研究が重視されているように見える。実際に本書でもそうした内容は多く含まれている。しかし、インターネットは、豊かな有効利用の可能性を持つテクノロジーとして期待されており、そうした期待に直接に応えうる研究や実践も重要であろう。そこで、本書では、インターネットの現実的な利用にあたって重要な示唆を与える研究や実践を積極的に取り上げるようにした。

このように、本書は、心理学やその近接分野におけるインターネット研究や実践に関する知見を、幅広い領域にわたって、先端性や実用性を重んじながら、解説するものである。本書には、従来の書物には見られなかった情報が多く含まれており、それは、教育、臨床、組織においてインターネットを有効に活用しようと考えている方々だけでなく、インターネット利用に関心がある、すべての方々にとって有益なものではないかと考えている。

最後に

冒頭で述べたように、本書は、本欄における連載記事をまとめ直したものであるが、本書に含められなかった記事もある。それゆえ、本書とともに、これまでの記事を合わせて参照することによって、さらに多くの有益な情報を得ることができるであろう。これまでの記事のリストを添付したので参照してほしい（表2）。また、本欄の連載は、今後も続く予定である。有益な情報を提供し続けたいと考えているので、今後も引き続き、ご愛読いただければ幸いである。

[注1]連載名は、1998年5月号から1999年4月号までは「『インターネットと教育』研究最前線」、19995年月号以降は「『教育とインターネット』先進研究論文を読み解く」となっている。

表1 本書の章立て

	タイトル	執筆者
序章	インターネットと心理学	坂元 章
第1部	教育におけるインターネットの利用	
第1章	教育現場におけるインターネット - 事例、特徴、課題 -	足立 にれか
第2章	インターネットと情報活用能力	森 津太子
第3章	インターネットによる国際理解	伊部 規子
第4章	ヴァーチャル大学の現在と未来	安藤 玲子
第2部	臨床におけるインターネットの利用	
第5章	インターネットセラピー	木村 文香
第6章	インターネットにおける自助グループ	内藤 まゆみ
第7章	身体障害者や高齢者とインターネット	坂元 桂
第8章	インターネットと偏見解消	向田 久美子
第3部	組織におけるインターネットの利用	
第9章	コンピュータネットワークを使った集団意思決定	高比良 美詠子
第10章	電子ブレインストーミングの有効性	塚本 久仁佳
第4部	インターネットの影	
第11章	インターネットと社会的不適応	小林 久美子
第12章	インターネットの有害情報	鈴木 佳苗
第13章	インターネットと差別	井出 久里恵
終章	教育、臨床、組織におけるインターネットの有効利用	坂元 章
付録	インターネット用語の解説	小林、安藤 伊部

表2 これまでの連載記事

タイトル		執筆者
1998 年		
5月号	急速に進み始めたインターネット研究	坂元 章
6月号	子どもの知力を高めるインターネット	高比良 美詠子
7月号	ネットワークゲーム (MUD) の教育利用	足立 にれか
8月号	子どもの社会性を高めるインターネット	森 津太子
9月号	教育における情報倫理	鈴木 佳苗
10月号	インターネットと差別	坂元 桂
11月号	インターネットと情報リテラシー	勝谷 紀子
12月号	インターネット中毒の諸相	小林 久美子
1999 年		
1月号	インターネットセラピーとは何か	木村 文香
2月号	インターネットと高等教育	鈴木 佳苗
3月号	ネットワーク会議の可能性	高比良 美詠子
4月号	教育とインターネットの学会事情	檀淵 めぐみ
5月号	インターネット・パラドックス -コミュニケーション・ツールとしてのインターネットが、対人関係や心理的健康を阻害する？-	森 津太子
6月号	学校教育用としての MUD	足立 にれか
7月号	インターネット中毒はコミュニケーション中毒？ -ネット中毒の原因を探る-	小林 久美子
8月号	インターネットを利用した外国文化・外国語教育	鈴木 佳苗
9月号	ネットワーク・コミュニケーションの活用術 -S I D Eモデルの可能性-	高比良 美詠子
10月号	独創的なアイデア産出を目指して -電子ブレインストーミング研究から-	坂元 桂
11月号	いつでもどこでも支えてくれる仲間たち -インターネット上の自助集団研究から-	内藤 まゆみ
12月号	子育てを支えるインターネット	向田 久美子
2000 年		
1月号	調査ツールとしてのインターネット	井出 久里恵
2月号	ネットで育む親密な関係 -関係形成の場としての MOO-	小林 久美子
3月号	新たな学校形態 -ヴァーチャル大学最前線-	安藤 玲子
4月号	2つのキーボードの効果 -インターネットを使った共同学習-	伊部 規子
5月号	研究を変えるインターネット -うわさの伝播の検討-	内藤 まゆみ
6月号	教師による電子会議の有効性 -匿名性の効果-	塚本 久仁佳
7月号 (本号)	教育・臨床・組織におけるインターネットの有効利用 -本連載の記事を一冊にまとめました-	坂元 章